

9 橋本遊郭保存の活動と政倉莉佳所蔵資料調査

竹中友里代

はじめに

八幡市橋本の中ノ町・小金川の一帯は、近代公娼制下の旧橋本遊郭の特徴的な建物群が残る地域である。京都市伏見区の中書島や撞木町などの近隣の旧遊郭街がほとんど面影を失っているなかで、比較的往時の雰囲気を残している。とりわけ京阪橋本駅の東には、石の門柱とブロック塀に囲まれた中にそびえ建つ二階建ての「天寿荘」は、橋本遊郭の歌舞練場であった。遊廓廃止後に、内部が小部屋に仕切られアパートとして改築されていたが、長らく居住者もなく荒廃し、2018年大阪北部地震や21号台風の被害で瓦の落下や崩壊の危機にあった。それでも橋本歌舞練場（写真1）は、橋本遊郭の繁栄を象徴する大型の建物であった。

1. 橋本歌舞練場の解体と棟札

八幡市橋本駅周辺再開発事業に伴い、歌舞練場が解体される、保存できないかと地元有志から連絡を受けたのが、2020年2月頃であった。八幡市教育委員会では、開発担当部局ではないので、保存の措置はとれないが、地域の文化財調査は現状可能な範囲で、駅前の火の見櫓・四区公会堂前の石碑「橋本記念碑」その他を記録調査したという。

市と地元有志の話し合いの場を持つ交渉を思案しつつ、新型コロナウイルスの緊急事態宣言下で、各自が外出自粛している中、2020年6月に取り壊し工事が始まっていた。

近年橋本遊郭の町並みに興味を持つ地元有志らとともに、橋本遊郭の資料を探索する中で、解体業者が棟札を保存しているとの情報を得て、実見に赴き銘文などを記録した。棟札（写真5）には大正11年（1922）7月29日に上棟式が行われたこと、この時橋本貸座敷組合の取締役辻本孝之助や後に取締役に就任する石原傳四郎、土家良太郎はじめ16名の建設委員が名を連ねている。さらに請負人は鯉谷政次郎ら4名が記されている。鯉谷政次郎は、橋本の鯉谷楼の楼主であり、八幡町役場建築委員・土木委員等を勤めていた。この建設委員16名のうち、四区区長や遊郭と直接のかかわりが明らかでない者もある。『城陽・八幡・久御山の今昔』掲載の古写真（写真3）をみると、二階部分には工事に携わる多くの職人が御幣を掲げ、二階前列には棟札を持っている。階下には羽織袴や背広姿に帽子をかぶり盛装した関係者ら多くの人が上棟式に参加した様子である。遊郭のためだけでなく、橋本地区全体の建物であったのかもしれない。

歌舞練場の建物は、昭和33年（1958）売春防止法による遊廓廃止の後、しばらくは橋本貸座敷組合が所有し、2階広間に設置されたテレビを見に地域の人が集まり、子供会の集会など橋本の公民館的な施設として利用されていた。その後建物は売却され、扶桑電気、天洋刺繍会社となり、そのたびに改修され、共同住宅の天寿荘で内部は大きく改変された。近年は全く

利用されなくなり破損が進み、修復して保存するのは困難な状態にあった。

2. 養神碑

歌舞練場が解体され更地になった後、敷地内にとり残された高さ約 170cm の石碑（写真 2）の保存が課題となった。石碑の表に「養神」と大書され「沙門徹宗書」に落款がある。裏面には橋本の歴史が十数行にも亘って刻まれているようだが、表面の剥落が著しく文字を読み解くことは困難であった。左下に「取締石原傳四郎謹識／一心堂 渋谷文法書之」とあり、長文の橋本遊郭の由緒を記述した文章は組合長の石原氏が起草し、草書の文字は一心堂渋谷氏の書であった。表の徹宗の豪快な文字に対して、裏面は変体仮名交じりの丸みを帯びた草書体で、石碑の字体の対比が興味深い。

養神を書いた沙門徹宗とは、大正 7 年（1918）に八幡市福祿谷にある円福寺の住職となり、寺の興隆に尽力した神月徹宗（1879～1937）である。徹宗は昭和 3 年（1928）6 月妙心寺管長に就任し、同年 12 月に橋本四区公会堂前にある「橋本記念碑」も揮毫している。橋本記念碑は、明治初年の事務上の手違いにより橋本の地名が行政上なくなり、昭和 3 年地域の念願がかなって地名復活を遂げたことを記念して建立された。

橋本とかかわりの深い徹宗の「養神碑」を保存する方法を地域住民と探る中で、養神碑が娼妓の墓石であるとの言い伝えにより忌避する意見が橋本住民から出された。慰霊祭が誤解されたのか、何らかの事件があったのか今は明らかではないが、地元の感情を勘案して橋本の地以外での保存案がとられ、円福寺の現住職や地元工事業者等の尽力により、2020 年 10 月 8 日に養神碑は円福寺霊園内に移設された。

歌舞練場や養神碑をめぐる地域史の理解のために、橋本遊郭の主な出来事を原史料である『橋本遊廓沿革誌』をもとに次頁の【橋本遊廓略年表】にまとめた。大正 11 年取締役辻本孝之助の時に歌舞練場が新築、昭和 4 年検査場手狭となり鯉谷政次郎取締の時に貸座敷組合の事務所を歌舞練場内に移転した。昭和 9 年に取締役の石原傳四郎が組合関係者と芸娼妓を追悼する慰霊祭を、僧侶 3 名を招いて挙行了。さらに石原は昭和 12 年遊郭再興 50 周年記念事業として、養神碑を歌舞練場前に設置し、祝賀式を執り行い、『橋本遊廓沿革誌』を著作刊行した。この『沿革誌』には、役員の顔写真、慰霊祭で歌舞練場に集まる芸娼妓、橋本に伝わる近世近代の古文書の写真も挿図され、石原が歴史に明るい楼主であったことを示している。

3. 政倉莉佳所蔵資料調査

橋本の町並みは、現在新築住宅に建て替わりつつあるが、それでも今まだ残っている遊郭の建物は、SNS や YouTube で紹介され、スタンドグラスや色タイル、波間に水鳥や鯉の彫物を施す建物の意匠を愉しみ散策する人もある。近年は、駅前の洋食店に加え、旅館業・中国式マッサージ治療院を営み、建物内部を公開している。2020 年 11 月 11 日、京都大学人文科学研究所高木博志・京都府京都文化博物館植田彩芳子両氏と共に旧三枳楼を調査した。遊郭には、八幡円福寺住職から明治 41 年（1908）に大徳寺派管長となった見性宗般の書の扁額や妖艶な女性を描いた日本画家として近年注目される梶原緋佐子の美人図等が確認できた。遊郭全盛期に橋本にもたらされた掛軸や書など、今後橋本の各家に伝わる資料調査が望まれる。

長らく一人暮らしの当主が2019年に亡くなり、売却に伴う内部の諸道具整理中に遭遇した。内部に入り第二友栄楼であった時代の資料を拝見する機会を得て、借用し調査（写真4）をおこなっている。昭和14年・19年～20年の遊客帳5冊、昭和10年～14年の家計日記5冊に台物控等の記録類、領収書等が確認できている。当家の主人は、大阪薬科大学の前身である帝国女子薬学専門学校で学んだ理系女子で、夫は大阪で教師をつとめ、社会教育にも関わる高学歴の家族であった。石原傳四郎が『橋本遊廓沿革誌』をまとめる著述家であったことから、遊廓主人の知識人としての実像や遊廓経営の実態を紐解く貴重な史料となろう。

【橋本遊廓略年表】

- 明治10年（1877） 木津警察監督のもと、橋本遊廓京都府知事の認可を受ける
- 明治20年（1887） 貸座敷・芸妓・娼妓・引手茶屋・紹介業の五業種組合を組織、中ノ町20に検徴場を兼ねて設立。組合長奥西松之助
- 明治33年（1900） 京都府貸座敷取締規則により、五業種組合を橋本貸座敷組合に改称
- 明治43年（1910） 京阪電車開通
- 大正7年（1918） 9月神月徹宗八幡の円福寺の住職に就任
- 大正11年（1922） 7月29日取締役辻本孝之助、歌舞練場兼芸娼妓慰安余興場の上棟式を行う
- 昭和3年（1928） 8月橋本の大字名復活、12月に四区公会堂前に「橋本記念碑」設置
- 昭和4年（1929） 10月取締役鯉谷政次郎は、検査場狭隘により事務所を中ノ町20から歌舞練場の焼野1・2に移転
- 昭和7年（1932） 3月神月徹宗は管長を辞任、円福寺で子弟教育・禅道復興に務める
- 昭和9年（1934） 取締石原傳四郎、正副取締役14名と故人の芸娼妓追悼の慰霊祭を挙げる
- 昭和12年（1937） 6月取締石原傳四郎により、遊廓再興50周年を記念して祝賀式を挙げる、『橋本遊廓沿革史』発行。歌舞練場前に記念碑（養神碑）建設
10月6日 神月徹宗四国巡化中に自動車事故により没59才
- 昭和33年（1958） 売春防止法成立により公娼制度廃止
- 昭和37年（1962） 橋本・大山崎の渡し廃止



写真1 橋本歌舞練場



写真2 養神碑

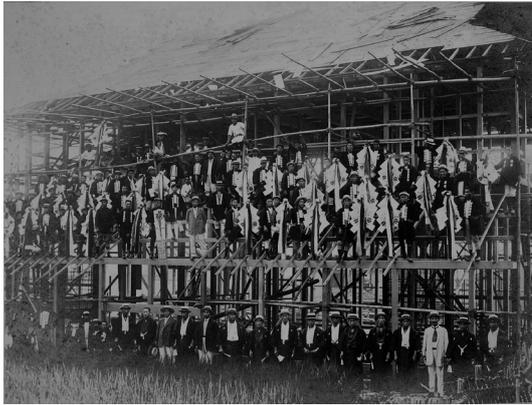


写真3 橋本歌舞練場の上棟式（『城陽・八幡・久御山の今昔』掲載）



写真4 調査の様子



写真5 棟札

（裏）
墨書なし

上棟大正拾一年七月廿九日

（表墨書銘）

建	辻本孝之助	森田幾之助	請	鯉谷政次郎
築	植村房次郎	岡村 晴介	負	大西克太郎
委	福井福之助	小川巳之吉	人	山崎 庄助
員	石原傳四郎	戸田 儀助		木下 茂吉
	中村徳次郎	増田 寅吉		
	辻井益次郎	井上芳太郎		
	中川 熊吉	今村庄太郎		
	土家良太郎	中務三之助		

【橋本歌舞練場棟札】
（寸法）
上巾二九・〇 下巾二〇・〇 総高一三六・〇 肩高一三二・〇 厚一・四 櫃（㎝）